

ヴィルコ・チエルヴェーンコフ「人民民主主義にか んする若干の問題にたいする回答」

柳, 春生
九州大学法学部

<https://doi.org/10.15017/1267>

出版情報：法政研究. 19 (2), pp.93-116, 1951-11-30. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

ヴイルコ・チエルヴェーニコフ

「人民民主主義にかんする若干の問題にたいする回答」

柳 春 生 譯

はしがき

左に譯した論述は、現在ブルガリア人民共和国首相であり、故ゲオルギー・デイミトロフの後継者たる、ヴイルコ・チエルヴェーニコフが人民民主主義の基本的な問題にかんする質問に答えたもので、「若干の問題にたいする同志ヴイルコ・チエルヴェーニコフの回答」と題してブルガリアの雑誌「ノヴオ・ヴレーメ」(“Novo vreme”「新時代」)に掲載されたのを露文より譯出したものである。

東南ヨーロッパにおける人民民主主義の研究は、一九四八年十二月にブルガリアおよびポーランドの労働者黨(共產黨)の大会において、人民民主主義がプロレタリア独裁の機能を果しているということがゲオルギー・デイミトロフならびにボレスラフ・ビェルトの報告によつて明らかにされて以來、ソ同盟科學アカデミーにおいて、とくにエヌ・ペ・ファルベロフおよびベ・エス・マニコフスキ兩氏の研究によつて著しい進展を示し、そしてそれらの研究の一部分はわが国にも紹介された。けれども、なおそれによつても、人民民主主義革命の性格についてはわれわれに若

干の不明確なものが残されていた。チエルヴェーニョフのこの論述は、ブルガリアにおける人民民主主義革命の基本的性格を明瞭にし、それとの關聯において現在の段階におけるこの国の階級構造を具体的にはつきりと指摘している點において、充分に紹介に値するものと考えられるのである。

一

敬愛する同志ゲ・サラコストフ！

あなたは、昨年十二月十六日に選舉人達の前でのわたくしの發言においてわたくしが述べたこと（「ロシアの労働者階級とロシアの農民はもつばら自分みづからの力によつて社会主義革命を遂行した」と同志スターリンが一九三一年二月四日に彼の演説において述べたこと）（「われわれは、ソ同盟の労働者階級の努力のみによつてではなく、世界の労働者階級の支持があつたからこそ、勝利したのであつた。かかる支持がなかつたならば、われわれはずつと前に粉碎されてしまつていただであらう」）（註一譯者）との間に矛盾がある、ということを見している。

そこには、矛盾が存するであろうか？

一見、矛盾があるようにみえる。けれども、それは一見そうであるすぎない。それは外見的な矛盾であつて、本質においては、矛盾はないのである。

同志サラコストフ、ロシアの労働者と農民が自ら社会主義革命を遂行したこと、外部から誰も彼等を解放するためによつてこなかつたことは、事實である。外部から誰も彼等に借款をあたえなかつたことは、事實である。彼等には、社会主義の建設にかんする助言者・専門家は、外部にいなかつた。彼等は、資本主義の包圍のもとにあつて、自己の力と自己の資力とによつて社会主義を建設したのである。

わたくしはわたくしの発言において、わが国においては一九四四年九月九日以後、ソ同盟が大十月社会主義革命によつて解決したのと同じ課題が解決されたが、ただわが国においてはこれらの課題はソ同盟におけると全く同じようには、同じ形態をとつては解決されていないのであつて、ちがつた様式で、しかもソ同盟の援助によつて解決されているにすぎない、ということを強調しようとした。わたくしは、ロシアの労働者と農民が自ら自己の革命を遂行したとき、彼等は自ら搾取階級および干渉者を粉碎し、革命の最初の日にすでにプロレタリア独裁を樹立し、しかもポリシエヴィキ黨はすでに革命の最初の日に国内における単一の黨としての支配的な、指導的な地位を占めたのであるが、わが国においてはそれとはちがつていたし、かつ今もちがつている、ということを強調しようとした。わが國の労働者階級と都市・農村のわが勤労者は、ファシズムの軛から、自らによつて解放されたのではなくて、ソヴェト軍によつて解放されたのである。わが國の社会生活および政治生活における重大なる轉換は、ソヴェト軍によるヒツトラー・ドイツの粉碎の結果、実現された。労働者階級の手の中への権力の移行は、ただちにおこなわれたのではなくて、漸次的に、ソヴェト軍（その軍隊はほとんど三ヶ年間にわが國にいた）の直接の、決定的な援助のもとにおける、執拗な、苛烈なる階級斗争の結果、おこなわれた。（傍点—譯者）わが國に開始された社会主義の建設は、ソ同盟の直接の、決定的な援助（わが國とソ同盟との相互援助および友好にかんする條約、ソ同盟との通商條約、恒久的な經濟援助およびその他の形態での援助、その他）のもとにおこなわれている。

わたくしは、ソ同盟とわが國における社会主義的變革の実現におけるこの相違を強調しなければならなかつた。何となれば、それは極めて重要な相違だからである。この相違は、ソ同盟の巨大な世界的役割を證明するものである。

しかし、このことは、世界の労働者階級の支持はロシアの労働者と農民の勝利にたいして何の關係をもたない、ということの意味するのであるか？否、意味しない。どんな場合においても、意味しない。同志スターリンは、世

資料

世界の労働者階級の支持は資本家達のソ同盟にたいする斗争において資本家にとつて大なる障碍である、ということを一
度ならず強調した。同志スターリンは、西ヨーロッパの資本主義諸国のプロレタリアートはソヴェト権力の基本的
な同盟者であり、十月社会主義革命の最大の予備隊であり、その最も信頼し得る、最も重要な同盟者である、とい
くことを一度ならず強調した。(註21譯者)

ソ同盟の労働者と農民は、干涉者に反抗するにあたり、社会主義を建設するにあつて、自己の巨大な資源を利用
しかつ全力を傾注しつつ、全世界の労働者階級の支持に依據したことは、疑ないことである。
その通りである。

しかし、いかなる支持が問題なのであろうか？

精神的な支持、間接的な支持が問題なのである。そしてそれは、極めて重要である、それは、同志スターリンの表
現によれば、貴重なるものである。しかし、それにも拘らず、この援助は、直接の、決定的な援助ではないのである。
わたくしはただこの意味において、ロシアの労働者と農民はもつぱら自分自らの力によつて社会主義革命を遂行し
た、と述べているにすぎないのである。

世界の労働者階級の同情と精神的な支持と、西ヨーロッパにおけるプロレタリア革命の勝利、すなわち、一國あるいは
若干の國々において勝利した労働者階級の側からの支持との間には、同志サラコストフ、大なる相違、しかも極めて
大なる相違があるのだ。

ロシアの労働者階級とロシアの農民とはもつぱら自分自身の力によつて社会主義革命を遂行した、とわたくしが述
べるとき、わたくしは、一國あるいは若干の他の國々において勝利した労働者階級の側からの直接の援助がなかつた
ことを考慮に入れているのである。

あなたも知つてゐるように、第一次世界戦争後、労働運動は第二インターナショナルの社会民主主義者の裏切者の
犯行によつて分裂した。ドイツ、ハンガリー、ポーランド、沿バルト海諸國およびわが國における革命は、勝利する
ことができなかった。世界のプロレタリア革命はソ同盟においてのみ勝利したのである。他の諸國においては、革命
はあきらかに停滯した。それで問題はつぎのように提起された。すなわち、一九一七年に資本家を権力から駆逐し
て、プロレタリア独裁を樹立したロシアの労働者と農民とは何をなすべきであるか？ 世界の労働者階級の支持が、
遺憾ながら、それ以上の同情に、それ以上の精神的な、間接的な支持にすまないし、また一國あるいは若干の資本
主義諸國における革命の勝利にいたらないという條件のもとにおいて、彼等は社会主義を建設し得るであろうか？
彼等は、かような勝利なくして、すなわち世界の労働者階級、植民地および被抑圧人民の同情と精神的支持に依拠し
つつ、しかしながらもつばら自分自身の資源と力とに頼つて、ソ同盟に社会主義を建設し得るであろうか？

周知のように、同志スタ、タ、リ、ンを黨首とする全ソ同盟共産党（ボリシエヴィキ）の指導のもとに、ロシアの労働者
と農民はこの問題にたいして肯定的に答えた。すなわち、彼等は、世界の労働者階級の精神的支持に依拠しつつ、そ
の直接の、決定的な援助なくして、社会主義を建設したのである。そして、第二次世界大戦の苛烈な日に、彼等は自
己の建設した社会主義を防衛したばかりでなく、一連のヨーロッパ諸國をファシズムから解放し、人類の文明を破滅
から救つた。

ソ同盟における社会主義社会は、世界の労働者階級の精神的支持に依拠したソヴェト労働者と農民自身の力によつ
て建設され得たし、建設されたのである。

わが國の社会主義的改造は、もつばらわが國の労働者階級および勤労農民の力のみによつてはおこなわれな
いしかつおこなわれ得ない。わが國の社会主義的改造は、ソ同盟の直接の、決定的な援助のもとにおこなわれる、そしてそ

の直接の、決定的な援助なくしてはおこなわれ得ない。

社會主義の終局的勝利——それは外國帝國主義者の干渉からの保障を意味する——のためには、他の主要資本主義諸国における革命の勝利が必要である。同志スタールンが教えているように、國際資本は、すべての国々のあるいは少なくともヨーロッパの主要諸國の勞働者階級の力によつてのみ、最終的におさえつけることができるのである。

第二次世界戦争後、ポーランド、チエツコ・スロヴァキア、ルーマニア、ハンガリー、ブルガリア、アルバニア——そこでは社會主義の基礎を建設することに成功している——における人民民主主義体制の勝利後、中華人民共和國、ドイツ民主主義共和国の形成後、われわれが確信をもつて社會主義の終局的勝利のための必要な前提をつくり出すことに向つて前進していることは、毫も疑ないところである。第二次世界戦争後、力の相互關係は、益々大きくかつ一層明瞭に、社會主義に有利にかわりつつある。

われわれには、ソ同盟において勝利した社會主義の全世界的・歴史的經驗がある。われわれはこの經驗によつて教わつてゐる。われわれは、まったくソ同盟に依存している、その全面的な、直接の支持と援助とを享有している。それは、われわれが勞働者階級としてソヴェト勞働者と農民、全ソ同盟共産黨（ポリシエヴィキ）、同志スタールンにお世話になつてゐるところの、世界の勞働者階級の最大の獲得である。すでにソ同盟においてつくられた社會主義社會を、われわれはわが国において建設している、そして最後まで建設するであろう。社會主義建設の合法性は、わが国においてもまた、それがソ同盟において存在したのと同様であるであろう。ソヴェト的道から原則的に區別されるところの、如何なる独自の、ブルガリア的道も存しないし、かつあり得ないのである。

けれども、わが國の特殊性のために、ソヴェト軍によるヒットラー・ドイツの粉砕後につくられた情況によつて、またその力強い、決定的な支持をもつソ同盟が存在しているという事情によつて、われわれは、ソ同盟において建設さ

れたと全く同一の形態をとつてわが國において社會主義の基礎を建設してはいない。

同志サラコストフ、わたくしは以上のような理由によつて、わたくしの發言において述べたことと、同志スターリ、ンがロシアの労働者および農民の國際的義務をとくに強調しているところの、一九三一年に經營者の協議会においてなした彼の演説において述べたこととのあいだには、本質において、現実に矛盾はない、と考えるのである。

一九五〇年二月二三日

ヴェ・チエルヴェーニコフ

註1 スターリン「レーニン主義の諸問題」、第十一版、三二九頁参照（「經營家の任務について」）。

註2 全右、一〇四頁参照（「十月革命とロシア共産主義者の戦術」）。

二

同志ラヂエフ！

あなたはつぎの問題について説明を求めている。すなわち、

(一) わが國にはどれだけ階級があるか、そしてそれらの階級はどんなものであるか？

(二) 農民層は完全な階級であるか、それとも身分であるか？

(三) もしも農民が身分であるならば、富農クラークにたいする貧農ベドニヤークと中農スレドニヤークの斗争は諸身分の斗争であるか、それとも

階級斗争であるか？

資料

わたくしはあなたに簡単に答えよう。

わが國には、現在、二つの基本的な階級、すなわち、労働者階級と勤勞農民階級（貧農と中農）とがあつて、この

資 料

兩者は同盟を結んでいる。そして、この同盟における指導的な役割は労働者階級に属している。労働者と農民との同盟の基本的任務は、資本主義的要素を抑制し、駆逐し、社会主義的要素の完全な勝利、すなわち社会主義の勝利を考慮して社会主義的要素を不斷に増大する、首尾一貫した政策を遂行することである。

階級としてのわが労働者階級には、變化が生じた。わが労働者階級は、最早、決して古い意味の言葉におけるプロレタリアートと看做してはならない。なお、搾取から解放されていない、若干の労働者階級の隊伍がある。富農クラークの經營で働いている農業労働者が、それである。しかし、わが國の労働者階級の大多数は、最早、資本主義に搾取されていない階級である。基本的な生産手段は労働者階級の手にある。労働者階級は國家を指導している。労働者の數は、國の工業化がおこなわれるとともに、日に日に増大している。しかし、社会主義はわが國にはまだ建設されていないし、また富農經營における労働者の搾取はまだ最後のに絶滅されていないので、わが労働者階級はソヴェトの労働者階級のような状態には、まだはるかに到達していない。けれども、わが労働者階級はソヴェト労働者の道をすすんでいる。そして社会主義が建設されるとともに、彼がソヴェトの労働者階級と同じような状態になるであろうことは、明瞭である。

勤勞農民にかんしては、現在、彼等はやはり小生産者階級としてとどまつている。人民民主主義の情況のもとにおいて、小生産者達のうちにも改革がおこなわれている。彼等は、農業生産協同組合にはいりつつ、漸次的に自己の小生産者の性格から解放されるであろう、そしてそういう性格を、ますます勤勞者の性格が克服してゆくであろう。小商品生産者には二つの心、すなわち勤勞者の心と所有者の心とがある。所有者の心は小生産者を資本家に接近せしめ、勤勞者の心は彼を労働者階級に接近せしめる。それゆえに、小商品生産者は動搖しつつある階級である。

労働者階級の任務は、小商品生産者達を自己の同盟者とし、彼等を資本主義的要素の絶滅のための斗争にみちびく

ことにある。貧農に立脚し、中農と同盟し、富農と斗争すること——これが、農村における種々の社会的集團にたいするわれわれの關係である。資本主義のもとにおいては、小生産者達の大部分は、苦しい、悲惨な生存を辛うじて保ち、プロレタリアートの部隊を補充している。小生産者のごくわづかな部分が、時折、ある事情によつて、資本家の列のなかに自己の進路をひらくことに成功するのである。

プロレタリア独裁の独特の形態たる人民民主主義の諸條件のもとにおいて、小生産者達は、資本主義的搾取、破滅と貧困から救われ、社会主義の勤労者となる可能性を得ている。わが貧農および中農は、まだ、改革の真に端緒的な段階にある。改革は長い過程を経るであろう。協同組合的、集團化的原理にもとづく農業の再建なくしては、貧農、中農の所有者的性質を克服することは不可能である。そのために、わが國にはまだ勤勞農民（貧農と中農）の經濟的地位における矛盾が存在するのである。われわれはこの矛盾を解消せしめねばならぬ。われわれが勤勞農民（貧農と中農）の個々の群の間の經濟的矛盾を解消せしめるのに成功すればするほど、彼等はそれだけ効果的に階級として単一なものに、労働者階級に友好的なものになるであろう。

かようにして、現在、わが國には二つの基本的な階級がある。それは、労働者階級と勤勞農民とである。まだ他の階級があるであろうか？

なお、資本家階級がある。

資本家階級は、都市においては根柢から絶滅されている。

けれども、資本家階級は農村においてはまだ絶滅されていない。資本家階級はここでは富農クラークによつて代表されている。クラークは資本主義の危険なかつ夥しい代表者である。一連の方策が遂行された結果、富農層（資本主義）の經濟的地位は漸次的に制限されかつ崩壊している。資本主義的要素は社会主義の攻撃にたいして狂氣じみた反抗を示し

ている。かかるゆえにこそ、人民民主主義の條件下において階級斗争が尖鋭化しているのである。

かように、わが国の資本家階級は、最早、基本的な階級ではない。それは、滅亡の運命にある階級、絶滅しつつある階級である。

インテリゲンチヤ、すなわち、智能労働の労働者——技師、技術家、科学、藝術、文化の働き手、教師、医師、事務員——は階級ではない。インテリゲンチヤは社会的中間層であつて、わが国においては彼等の大多数は、ますます人民民主主義の事業に、社会主義に、参加している。

手工業者もまた、一個の獨立した階級ではない。彼等は小商品生産者であつて、資本主義のもとにおいてはその大多数は零落して、プロレタリアートの隊伍を補充している。だがわれわれの條件下においては、彼等は生産協同組合の道をすすみつつ、社会主義の勤労者に轉化するであろう。

これまで述べたことからして、富農（これもまた農民である）をも含めての全体としての農民は階級ではなく、階級たり得ない、ということが結論されるであろう。農民は、封建制度のもとにおいてはかような階級であつた。すなわち、トルコの羈絆のもとにあつた時代には、二つの基本的な階級、すなわち支配階級たる地主（チヨコイ、土地所有者）と被支配階級たる農民とがあつた。けれども、封建社会においては、個々の社会階級および集團（領主、貴族、僧侶、農民、商人、町人その他）が相續権によつて移轉される特別の權利および義務によつて相互に區別されたとき、階級的相違は身分間の相違の形態をとつたのである。

これまで述べたことからして、わが国における貧農および中農の富農にたいする斗争は、「身分」の斗争ではなくて、階級斗争である、そしてこの階級斗争はおさまらないで、激化するであろう、ということが結論されるであろう。階級斗争は激化するであろう。というのは、資本主義的要素が自分の滅亡の近いのを予感して、全力をあげて、

あらゆる手段をもつて、反抗するであらうからである。

一九五〇年二月二六日

ヴェ・チエルヴェーニコフ

解 説

チエルヴェーニコフのこの論述は、なかんずく、彼が人民民主主義革命とソ同盟のプロレタリア革命との相違を明確に示摘し、それによつて人民民主主義の特質を明らかにした點に、その重要性をもつている。革命の本質を最もよく知つているのは、革命を身をもつて体験した革命の指導者達である、ということとは論ずるまでもないであろう。

「あらゆる革命における最も重要な問題は、国家権力にかんする問題である」(註1)(レーニン)。すなわち、いかなる階級が権力をにぎつてゐるか、いかなる階級が倒されねばならないか、いかなる階級が権力を握るべきであるか、この點に革命の根本問題が存するのである。(註2)

註1 レーニン全集、第二一卷、一四二頁。

註2 スターリン「レーニン主義の諸問題」、第十一版、一五五頁。

東南欧における人民民主主義革命は、その階級的な性格において、**社会主義的**の革命である。(註) 何となれば、労働者階級こそがこの革命の發展の方向を規定した決定的な階級であり、さらに、革命は、ブルジョア民主主義革命の課題を解決しおえる(農業における封建的殘滓の清算—農業改革)とともに、すでに**社会主義**の基礎を建設する段階に入つており、そして革命の全過程を通じておこなわれた激烈な階級斗争によつて労働者階級とその黨(共産黨)への權力の移行が實現されたからである。人民民主主義革命は、チエルヴェーニコフが正しくも述べているように、ロシア

の十月革命が果したのと同じの課題を果したのである。十月社会主義革命（プロレタリア革命）と人民民主主義革命とは、いづれも社会主義型の革命であるという点では同一性をもっているが、またそれぞれあいことなる歴史的特質をもっている。

それでは、これらの歴史的特質はどこに存するであろうか？

註 ベ・エス・マニコフスキ「人民民主主義国家の階級の本質」、『ソヴェト国家と法』誌、一九四九年第六號、七頁参照。

§

われわれが第一に問題としなければならないのは、人民民主主義革命においては労働者階級への権力の移行はいかにしておこなわれたか、ということである。これが最も重要な問題である。

ソ同盟においては、一九一七年十月ロシアのプロレタリアートは、貧農と同盟してブルジョアジエの権力を打倒して権力を掌握し、プロレタリアートの独裁を樹立した。ブルジョアジエの権力を倒すための革命的斗争の主力はプロレタリアートであつたが、プロレタリアートの強固な同盟者となり得たのは、貧農層のみであつた。そういう意味で、革命はプロレタリア革命であつた。権力を掌握したプロレタリアートの党たるポリシエヴィキは左翼エス・エルと提携して、彼等と形式的には国家の指導を分つたのであるが、しかしそのことは、ポリシエヴィキ党の指導的な地位をいささかも制限するものではなかつた。例えば、レーニンを首班とする十三名の人民委員のうち左翼エス・エルは四名を占めるのみであつたことを考えても、そのことはわかる筈である。スターリンはこれについて言及しつつ「ポリシエヴィキが多数派であつたので……すでにその當時わが國にはプロレタリアートの獨裁が存在した」と述べ（註）ている。しかも、ポリシエヴィキと左翼エス・エルとの協定は一九一八年七月における後者の叛乱までしか續かなかつた。そしてこの叛亂以後は、この提携の決裂以後は、指導権は完全にポリシエヴィキ一党にうつつたのである。

また、十月革命とともにボリシエヴィキは舊國家機關をことごとく破壊して、新しいソヴェト國家機關をつくりあげた。プロレタリア独裁の任務にかなう新しい形態の國家機關たるソヴェトは、労働者階級の手握られたのである。かくして、最初のソヴェト憲法たる一九一八年のロシア共和國憲法は、國家におけるプロレタリアートの指導的役割（獨裁）を法制的に確立した。^(註2)

註1 スターリン「レーニン主義の諸問題」、第十一版、一六三頁。

註2 「フ・パモチイ・イヌクナチイ・イストリユ・ヴェ・カ・ベ」
「全ソ同盟共産黨小史解説全書」第七卷、一九四九年、一〇四頁、一二六頁、邦譯、一四八頁、一七七頁参照。なお、

ア・イ・デニソフ監修「ソヴェト國家および法の歴史」一九四九年、三五頁、九一頁参照。

人民民主主義諸國におけるプロレタリアートによる權力の獲得の過程は、ソ同盟におけるとはことなっている。

人民民主主義革命は、資本主義の一般的危機とソ同盟の存在という条件のもとにおいておこなわれた。ブルガリアにおいては、一九四四年九月九日、ソヴェト軍の援助のもとに、労働者党（共産黨）の指導する勤労諸階級（労働者、勤労農民、手工業者、進歩的インテリゲンチヤ）の同盟・反ファツシヨ統一戦線たる祖国戦線（人民民主戦線）に結集したブルガリア全人民の武装蜂起によつて、王制・ファシスト權力は打倒された。權力は祖国戦線に、すなわち人民の手につつたのであるが、しかしそのことは、まだ労働者階級の手につつたこと（労働者階級の獨裁）を意味するものではなかつた。労働者党が、ただちに社会主義的改革に着手しなければならぬという意見をおさえて、戦争によつて破壊された國民經濟の復興に力をそそいだのも、これとの關聯において理解されるのではなからうか。さらに、九月九日の變革によつてブルガリアの君主制は根本的に破壊されず、一九四六年九月八日の國民投票による王制廢止まで、祖国戦線の監督のもとに残存した。そのことは、旧國家機關の破壊がソ同盟の十月革命におけるように一舉にしておこなわれなかつたことを示すのである。

それゆえに、チエルヴェイニコフが、労働者階級の手の中への権力の移行は、ただちにおこなわれたのではなくて、漸次的に、ソヴェト軍の直接の、決定的な援助のもとにおける、執拗な、苛烈なる階級斗争の結果、おこなわれた、とべているように、ブルガリアにおける労働者階級の獨裁は、九月九日にはじまる、都市・農村の搾取階級にたいする勤労階級の長い、はげしい階級斗争を通じて人民権力が強化され、労働者党の指導権が確立され、強化されることによつて、確立された、とみるべきであらう。^(註)

註 歴史學研究会一九四九年度大会において、前野良氏も「解放後ただちにプロレタリアート獨裁の革命権力が成立したのではな
い」と報告されている。(歴史學研究会編「世界史の基本法則」、七二頁参照)

同じことは、他の人民民主主義國についてもいわれ得る。ハンガリー勤労者黨(共産黨)書記長マチアス・ラコシはつぎのように述べている(一九四九年一月六日)。

「わが國においては共産黨は二年半の苦しい活動の後をはじめて、工業労働者、勤労農民、進歩的知識人の多數を糾合することができたのであつた。……ソヴェト人民による解放の支持はそれだけでは充分ではなかつた。人民民主主義の体制をとるためには、工業労働者階級とその同盟者たる勤労農民、小商工業者、進歩的知識人が、共産黨を彼等の指導者とみとめることが必要であつた。……そしてわれわれが勤労人民の大多數を獲得しえなかつた間は、わが國には一九一七年のケレンスキー時代に似た一種の『二重政權』があり、資本主義の手先と社会主義の支持者とがふたつ同時にあつて、たがいにたたかつていたのである。このたたかいは、ソヴェト同盟と人民民主主義の勝利に終つたが、達成された成果を確立するためには、まだ長い年月が必要であり、またソ同盟と人民民主主義とがたがいにたすけあうことが必要である。^(註)」

註 一九四九年三月二十日「アカハタ」掲載。

マニコフスキもルーマニアについて同じようにのべている。

「ルーマニアでは、廣汎な人民大衆の階級斗争は、ただちに労働者階級の獨裁の勝利に、獨裁の確立にみちびかなかつた。この国では、労働者階級による国家の指導を實現させるものとしての人民民主主義権力は、ラデスク政府の顛覆の後、およびミハイ王の退位（一九四七年十一月三十日）の後にいたつてはじめて強固になつた、とみなされるのである。」（註）（ゲオルギウ・デジも一九五一年五月四日の「恒久的平和」紙において同様の結論に到達している。）

註 マニコフスキ「人民民主主義国家の階級の本質」、ソヴェト国家と法」誌、一九四九年第六號、七頁。

ただ、アルバニアにおいてのみは、旧国家機關の破壊、共産党のヘゲモニの確立は、他の人民民主主義諸国に比して急速におこなわれた。一九四二年共産党の指導のもとに獨伊ファシスト占領軍にたいする武力斗争の機關として發生した人民ソヴェトは、革命の過程において新しい地方権力機關として發展した。一九四四年十月二十日の解放後に成立したアルバニア臨時民主政府の首席には、共産党中央委員会書記長エンヴェル・ホツジャが選出された。また、解放斗争と革命の過程において成立した大衆的政治團體たる「民主戦線」を構成したのは、共産党以外には労働組合、反ファツシヨ青年・婦人團體、科學・技術者達であつた。すなわち、ここでは共産党の一党制が早く確立されたことがわかるのである。一九四五年十二月二日の人民會議の選挙において民主戦線は投票總数の九五%を獲得した。かくして、アルバニアの人民民主主義体制は確立し、一九四六年三月十六日人民會議は人民共和国アルバニア憲法を採擇した。

註 ベ・マンチハ「社会主義へすすむアルバニア」、一九五一年、国立政治文献出版所發行、二四—二五頁参照）。

資料

九月九日の解放以後ブルガリアにおける労働者階級の権力の確立の過程は、つぎのとおりである。
一九四五年十一月ブルガリア大人民議會の選挙は、投票總数の七十%以上を獲得した祖国戦線の勝利に歸し、しか

も労働者党は全得票数の五十%以上を得て大人民議会の多数派を形成するにいたつた。「労働者階級の指導的役割は、大人民議会後に組織された新祖国戦線政府の編成にはつきりと示された。祖国戦線は強化され、右翼分子は除外された」(デイミトロフ「ブルガリア労働者党第五回大会における報告」)。この間に企だてられた内外の反動勢力の攻撃がごとく失敗したのは、講和條約が成立して国の國際的地位が安定するまで国内にソヴェト軍がいたことに大いに影響されているのである。一九四七年十二月大人民議会は九月九日以後に獲得された政治的・経済的成果を立法化したブルガリア人民共和国憲法を制定した。

一九四七年四月に開始されたブルガリア国民経済二ケ年計畫の実施によつて國民經濟の復興は完了したが、生産力のより以上の發展のためには、資本主義の根柢を破壊し、社会主義へ前進することが必要であると認められた。一九四八年二月に開かれた祖国戦線全国大会は祖国戦線の綱領を改訂した。そしてこの新しい綱領は、社会主義への移行を課題として提起する^(註1)とともに、労働者党の指導的役割を承認した。それはまさしく大衆的政治團體としての祖国戦線の大きいなる質的变化である。かくして、一九四七年末より大・中工業企業、鑛山業、銀行、外國貿易、国内卸賣商業が国有化された。工鑛業、銀行の国有化は、すなわち、国家が國民經濟の中樞部を握つたことは、国の社会主義への發展の條件をつくりだすものであつた。^(註2)一九四八年末には一九四九—五三年國民經濟五ケ年計畫が決定され、一九五〇年には工鑛業の生産力は戦前の數倍に高まつた。

註1 詳細については、世界經濟研究所編「人民民主主義の成立と發展」六〇頁参照。

註2 上林貞二郎「人民民主主義の政治と經濟」(經濟學雜誌、第二十三卷、第五・六號)二二頁参照。

ここで問題となるのは、人民民主主義諸国におけるプロレタリアートの獨裁の確立の時期はいつであるか、ということである。この点が今までの研究でははつきりしていなかつた、少くとも人々を納得せしめるに足る説明がなされ

ていなかつた。しかるに、人民民主主義のすぐれた研究家ベ・エス・マニコフスキは最近の研究においてつぎのような正しい結論に到達した。すなわち、

「人民民主主義の發展過程において労働者階級とその党とは、民主主義的改革を実現し・擴大しつつ、廣汎な人民大衆を彼の側に獲得し、ブルジョア的分子を人民民主主義に敵意をもつものとしてつぎつぎに大衆の眼前において暴露し、そして彼等を権力から放逐した。プロレタリアートは、熾烈な階級斗争において勤労大衆を組織し、結合し、彼等のうちにおける自己の影響と權威とを強めつつ、全権力と共産党の全一的指導とを獲得した。一九四七年の後半期より一九四八年の前半期までに、あらゆる人民民主主義諸国において基本的な反動勢力は粉碎せられ、勤労農民との同盟におけるプロレタリアートの全権力は確立せられ、共産党の指導的役割は一般に承認されるところとなつた。」

註 マニコフスキ「中・南東ヨーロッパの人民民主主義国家は社会主義型の国家である」、一九五〇年、モスクワ、八頁（傍點一譯者）

それで、この段階までは労働者階級は他の勤労諸階級と権力を分つていた、と解すべきではなからうか。

人民民主主義国家における労働者階級の権力（獨裁）はかようにして確立されたのである。ゲ・デイミトロフは、一九四八年十二月ブルガリア労働者党第五回大会（註一）における報告において、正しくも人民民主主義国家の本質をプロレタリアートの獨裁であると規定した。

「人民民主主義国家は労働者階級の指導のもとにある勤労者・人民大衆の権力である。このことは、第一に、資本主義的分子ならびに大土地所有者の権力の廢絶、および労働者階級の指導下における勤労者階級の権力の確立を意味し、第二に、国家が搾取的諸分子にたいする勤労者の斗争の要具となつていることを意味する。人民民主主義国家は、国の社會主義への發展を保證する過渡期の国家である。資本家および大土地所有者の権力は打倒されたけれど

も、資本主義の根底はまだ絶滅してはいない。社会主義への前進は、ただ、かれらの完全な絶滅にいたるまでの資本主義的分子との階級斗争によつてのみ可能である。人民民主主義は、所与の歴史的條件のもとにおいて、資本主義的要素の絶滅、社会主義経済の組織のために、プロレタリア獨裁の機能を遂行しなければならぬ。^(註2)

「マルクス・レーニン主義の命題に即應して、ソヴェト体制と人民民主主義体制とは、同一の権力すなわち都市・農村の勤勞者と同盟せる勞働者階級の権力の二つの形態である。この二つの体制は、プロレタリア獨裁の二つの形態である。わが国における資本家主義から社会主義への移行の独自の形態も、すべての国々に共通な、資本主義から社会主義への移行の基本的な合法性をかえることはできない。社会主義への移行は、資本主義的分子を抑壓し、社会主義経済を建設するためのプロレタリアートの獨裁なしにはおこなわれ得ない。……人民民主主義とソヴェト権力との一致點は、兩者が勞働者階級の指導的役割のもとに勤勞者と同盟せる勞働者階級権の力である、という點に存する。^(註3)」

註1 この大会は黨名をブルガリア共產黨と改めた。

註2 一九四八年十二月二日「プラウダ」紙。

註3 全年全月二十七日「プラウダ」紙。

ここであきらかにしておかねばならないのは、プロレタリアートの獨裁とは何であるか、ということである。

プロレタリアートの獨裁^(註1)ということは、プロレタリア一階級^(註1)のみの権力、この階級の政治的支配^(註1)ということである。それで、プロレタリアートの獨裁^(註1)という概念には、プロレタリアートが單獨で権力を握り、政治的支配を実現する、ということが含まれている。^(註2)レーニンはつぎのようにかいている。

「政治的支配権をその手中に握つた階級は、この支配権を單獨で掌握することを意識して、これを掌握したのである。このことは、プロレタリアートの獨裁の概念のうちに含まれている。この概念は、一つの階級が單獨で政治権力

をその手に握ることを知り、『全国民的な、普通選挙による、全国民によつて神聖なもののみなされた』^(註3) 権力などというおしやべりによつて自分をもまた他の人びとをも欺まんしない場合にのみ、はじめて意味をもつのである。」「レーニンはこので、プロレタリアートの独裁は「全国民的な」、「階級的でない」^(註3) 権力とはことなる、そういうものと混同してはならない、ということをとくに強調しているのである。

プロレタリアートが単独で権力をにぎるといふことは、プロレタリアートが他のいかなる階級とも権力をわかたない、ということの意味する。けれども、プロレタリアートのにぎつてゐる権力は、自己の目的を實現するためには、援助を必要とし、他の勤労階級や他の階級の被搾取大衆との同盟を必要とするのである、とスターリンはのべている、そしてつぎのことを指摘している。

「この権力、この一階級の権力は、プロレタリア階級と小ブルジョア諸階級の勤労大衆、なによりもまず勤労農民大衆との同盟の特殊な形態によつてのみ、確立され、徹底的に遂行され得るのである。^(註4)」

したがつて、プロレタリアートの独裁とは、労働者階級とその党、すなわち他の党と指導をわかたないしかつわかつことのできないところの共産党の指導のもとにおける、労働者階級と勤労農民階級との間の階級的同盟の特殊な形態である。^(註5) それでは、同盟の特殊な形態とは何であるか。スターリンはつぎのように説明している。

「同盟のこの特殊な形態は、この同盟の指導的勢力がプロレタリアートであるといふことにある。それ、すなわち同盟のこの特殊な形態は、国家の指導者、プロレタリア独裁の体系における指導者が、他の諸政党と指導をわかたない、またわかち得ない一つの党、すなわちプロレタリアートの党、共産主義者の党であるといふことにある。^(註6)」

資 料
スターリンはこのようにプロレタリア独裁の特質をあきらかにすることによつて、プロレタリア独裁のもつ三つの面を分析し、これをつぎのように定式づけている。

(一) 搾取者を抑圧するため、国を防衛するため、すべての国において革命を發展させ、勝利させるために、プロレタリアートの権力を利用すること。

(二) 勤労者と被搾取大衆とをブルジョアジーから最後の切りに切りはなすため、プロレタリアートとこれらの大衆との同盟を強固にするため、これらの大衆を社会主義建設の事業に引き入れるため、またこれらの大衆をプロレタリアートが国家的に指導するために、プロレタリアートの権力を利用すること。

(三) 社会主義を組織するため、階級を絶滅するため、階級のない社会、国家のない社会にうつるために、プロレタリアートの権力を利用すること。^(註7)

スターリンは、さらにプロレタリアートの独裁とはこの三つの面の統一されたものであるとみている。すなわち、「プロレタリア独裁はこの三つの面をすべて結合したものである。これらの面のどの一つも、これをプロレタリアートの独裁の唯一の特徴的な指標として抜き出すことはできないし、反対に、これらの指標のうちの一つでも欠けている場合には、プロレタリアートの独裁は、資本主義の包圍という情勢のもとで、それだけで、獨裁ではなくなってしまうのである。それゆえに、プロレタリア獨裁の概念を歪曲する危険を犯さずに、これら三つの面のうちのどの一つも除外することはできない。これら三つの面が一しよにされた場合にのみ、プロレタリア獨裁の完全な、完成された概念があたえられるのである。^(註8)」

かくして、スターリンによれば、プロレタリアートの獨裁とは、搾取者の弾壓、同盟階級にたいするプロレタリアートの指導、および社会主義の建設という三つの要素をもつものであり、かつ三つの要素の統一として存在するのである。

註1 レーニン全集、第二四卷、三九八頁、「プロレタリアートの獨裁とは一つの階級の権力である」。

註2 ア・ヤ・ヴィシンスキー「国家および法の理論の諸問題」、第二版、モスクワ、一九四九年、三六六頁。世界經濟研究所譯「プロレタリア革命およびプロレタリア国家にかんするレーニン、スターリン」、一四五頁。

註3 レーニン全集、第二六卷、二八六頁。

註4 スターリン「レーニン主義の諸問題」、第十一版、二一四—二一五頁。

註5 ヴィシンスキー、全書、全頁。

註6 スターリン、全書、一一五頁。

註7 スターリン、全書、一一七頁。

註8 スターリン、全書、全頁。なお「一九二五年六月スヴェルドロフ大學における演説にたいする質疑應答」(高山譯「続レーニン主義の諸問題」一一五頁)を参照せよ。

人民民主主義国家はプロレタリア獨裁のこの三つの面のいづれをももっている。^(註)人民民主主義国家においては社会主義が国民經濟のあらゆる面においてまだ實現されてはいないが、社会主義的部門が国民經濟の指導的部門を占めている。そこにはなお、資本主義的、小商品的ウクライドが残存している。それで經濟全体が單一の社会主義的經濟制度に轉化するの、なお將來のことである。

註 マニコフスキ、前掲書、九—十頁参照。

資料
したがつて、人民民主主義諸國においては、アルバニアを除いては、ソ同盟とことなり多数の政党が存在している。だが、そのうち重要なものは、労働者と勤勞農民という基本的な二つの階級に照應して、勞働者階級の党たる共産党とその他では農民の諸政党である。社会黨はすでに共産黨に合同・吸収されている。だが農民の諸政党は共産黨の指導的役割を認めている、それゆえに、勞働者、勤勞農民、勤勞インテリゲンチヤのブロック(同盟)たる人民民主

戦線は、基本的にはプロレタリアートと勤労大衆との同盟であり、しかもこの同盟の指導力・主導力たるものは、^(註1) 共産黨である。それで、労働者階級の指導のもとに、勤労大衆との同盟によつて實現される、プロレタリアートの單一権力は、人民民主主義体制においても存在するのである。^(註2)

註1 「ユーゴ・スラヴィア共産黨の内部事情にかんするコミンフォルムの決議」(一九四八年六月二九日「ブラウダ」紙)参照。

註2 エヌ・ペ・ファルベロフ「人民民主主義諸国における諸階級と諸政黨について」、「ソヴェト国家と法」誌、一九四九年第一九號、一八頁。

しかし、人民民主主義の發展は多黨制の清算と單一黨の確立にすむであろう。何となれば、社会主義への移行とともにますます激化する階級斗争による勤労大衆の意識の成長は、小ブルジョア諸政黨の存在する基礎を消滅せしめるであらうからである。

§

人民民主主義の第二の特質としてとりあげられるのは、農業の社会主義的再建の方法である。

ソ同盟においては一九一七年十月二六日「土地に關する布告」によつて、土地の私有は永久に禁止された。そこでは地主的土地所有の没収がおこなわれたばかりでなく、すべての土地の國有化が實現された。そして、土地の國有化が農業の社会主義的、集團的經營(コルホーズ)への移行を容易にしたのである。

しかるに人民民主主義諸国における土地改革は地主的土地所有を廢止したけれども、すべての土地の國有化を實現せしめなかつた。國有化されたのは一部の土地で、大部分の土地は勤労農民の所有となつた。しかし同時に土地のかなりの部分が富農の手に歸した。このことが、人民民主主義諸國の農業の社会主義的改造を困難にしているのである。

人民民主主義諸国においては小農民経営が圧倒的である。それゆえに、発展しつつある工業の要求に応じて、農業の小商品生産様式をいかにして大規模な社会主義的生産に移行せしめるか、ということが當面の課題となつてゐる。

勿論、土地改革は勤勞農民（中・貧農）の經濟状態を改善したのであるが、同時に農村における富農と貧農との對立をつくりだし、したがつて勤勞農民大衆を搾取と貧困から完全に解放することはできなかつた。ソ同盟では富農を制限・抑圧し、これとのはげしい階級斗争を通じて、分散した農民經營を協同組合に統合し、さらにこの小農民經營を大規模な集團化經營に移行せしめる方策がとられた。そして、農業の集團化＝社会主義的建設の不可缺の條件たるものは、土地の国有化である。

けれども、土地の国有化がなされねば農村に何等の社会主義的方策をも実施されないとはいえない。土地の国有化が順序として第一になされねばならないという法則は存しない筈である。スターリンはつぎのことを指摘している。

「資本主義諸国におけるプロレタリア革命にとつては、プロレタリアートによる権力の掌握のその最初の日から、すぐに土地国有化の基礎の上に社会主義を建設すべきか、それともこのような基礎なくして社会主義を建設すべきかは、きめかねることである。」^(註)

註 スターリン「レーニン主義の諸問題」、第十一版、二八三頁、△ソ同盟における農業政策の諸問題によせて▽。

人民民主主義諸国においては土地私有の條件のもとで各種の勤勞農業協同組合——販賣、購買、生産——が發展しつつある。ただ土地私有の存在は生産協同組合をして不勞所得をとまなう下級の形態にとどまらしめてゐる。とはいえ、人民民主主義諸国の勤勞農業協同組合は社会主義的經營の端初的形態であるとみなされる。しかしながら、窮極においては、すべての土地が国有化されねば、農村の社会主義的改造はできないのである。それゆえに、人民民主主義諸国においては、問題は、土地の国有化にむかつて実践的にいかにして接近するか、ということに存するのであ

る。それは、現在の条件のもとでは、労働者階級の指導のもとに勤労農民の富農にたいする階級斗争の過程において実現されるであろう、すなわち、富農の土地の没収なくしては土地の國有化は不可能である。^(註1) デイミトロフは、ブルガリア労働者黨第五回大會における報告の結語において、土地の國有化に近づいてゆく具体的な方策ならびに農業の社會主義的改革の進路をつぎのように指示している。

「われわれは現在の事情のもとで、勤労協同組合農業經營の發展のもとで、土地の國有化が農業の發展の必須の條件であるとは考えない。しかし、土地の國有化なくして農村における社會主義の建設・実現が一般に可能であるという結論はいかにしてもだすことはできない。しかしながら、貧・中農を勤労協同組合農業經營に徐々にひきこみ、エム・デー・エス(機械トラクターステーション)を増加し、土地の小作を禁止し、土地の売買を制限または禁止することによつて、われわれは實踐的に土地國有化の問題が解決され、しかもすべての土地が勤労農民の永久的な利用に供されるところの条件をつくりだすであろう、と考えるのである。かくして、一握りの土地の奴隸となつている勤労農民は、廣く土地の成果を利用できるのであり、土地面積も協同組合農業經營の近代化と機械化の結果、著しく増大するであろう。^(註2)」

註1 エス・プロフ「人民民主主義諸国における農業の再建」、^(註1)「經濟學の諸問題」誌、一九四九年第十号、ならびにエヌ・デイ・カザンツェフ「人民民主主義諸国の農業改革」、^(註2)「ソヴェト国家と法」誌、一九四九年第六号、を参照せよ。

註2 一九四八年十二月二七日「プラウダ」紙。